A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

26

中央公論社

世界の文学　26　©1966

ヘンリー・ジェイムズ

訳者　谷口陸男

昭和41年6月1日初版印刷
昭和41年6月10日初版発行　価390円

発行者　宮本信太郎

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　協和製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

ボストンの人々　3
解説　514
年譜　528

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

ボストンの人々

第一章

「オリーヴは十分ほどしたら降りてまいります。そうお伝えして下さいということでした。十分ほどだなんて、いかにもオリーヴらしい言い方ですわ。五分でも十五分でもないんですからね。しかも、あの人の言う十分は、いつだってきっかり十分ではなくて、たいてい九分か十一分なんですの。それに、オリーヴったら、あなたにようこそおいで下さいましたとご挨拶しないでくれと申しますのよ。まだようこそかどうかわからないし、心にもないことは申したくないからなんですって。まったくオリーヴ・チャンセラーの真っ正直さときたらたいへんなものですわ。嘘のうの字も言えない人なんですからね。そういえば、ボストンの方って、どなたも嘘をつくのがおきらいですのね。私などにはとても及びもつかないことですわ。まあそれはそうと、ようこそいらして下さいましたわね」

こういう言葉をよくまわる舌でぺらぺらとしゃべりたてながら、肥り肉の金髪の婦人がにこやかな微笑を浮かべて狭い応接間にはいってきた。部屋では、一人の来客が少しまえから、待たされているあいだのつれづれに、一冊の書物に読みふけっていた。しかもそれは、腰を降ろすことさえ忘れた熱中ぶりであった。おそらく、部屋へ通されるとすぐに、テーブルにあったその書物を取り上げ、その場に立ったままひとわたり部屋を見まわしただけで、たちまちわれを忘れて読みはじめたのであろう。ルナ夫人が近づいたのに気がつくと、客はあわてて書物を下に置き、笑い声をあげて夫人のさし出した手を握りながら、彼女の言った最後の文句にこう答えた。「とおっしゃいますと、つまり、あなたは嘘をおつきになるということになりますね。ようこそなどとおっしゃったのがそもそも嘘なんでしょう」

「あら、とんでもない。ようこそと申し上げたのは私の本心からですわ」とルナ夫人は言いかえした。「私ももうこれで、このごまかしのきかない町にまいりましてから三週間にもなるんですもの」

「それは、どうも、ぼくにはあまりありがたいお言葉とは聞こえませんね」と青年は答えた。「ごまかしを言わない点にかけては、このぼくにしましてもご同様ですからね」

「おやおや、それじゃ南部の人間もすっかりとりえがな

くなってしまうじゃありませんの？」と夫人が言った。「それから、オリーヴがぜひあなたにディナーをさしあげたいのでごゆっくりなさって下さいと申しておりましたわ。あの人が言い出したからには、ほんとにそうしたいと思っているんですわ。本気であなたをお招びする覚悟でいるんですのよ」

「こんななりでですか？」来客は、普段着に近い自分の服装をかえりみながらたずねた。

ルナ夫人は男の身なりを頭から足の先までちらと見やって、さも長々と並んだ数字の寄せ算かなにかを見せられたときのように、微笑まじりに軽い溜息をついた。たしかに、このバジル・ランサムという男はたいへん長身で、そのうえ、数字の列を思わせるような、どことなく固苦しい味気ない感じさえあった。この家の女主人の代理に対してつとめて親しげな笑顔をつくりはしたが、やせたその顔には、若さにも似合わず、口の両側にそってうるおいのないひからびたしわが深く刻まれていた。背が高くやせたからだを、彼は上から下まで黒ずくめの服に包んでいた。ワイシャツの襟は低い幅広のもので、チョッキの胸もとから三角の形にのぞいているリンネルは、少ししわができていたが、そこには小さな赤い宝石をはめこんだネクタイ・ピンが輝いていた。ところが、こんな飾りをつけていても、この青年にはなんとなくみすぼらしい印象があった――彼のようなりっぱな容貌とすばらしい目をもった若い男がこれほど風采のあがらぬというのも、まったく珍しいことだった。バジル・ランサムの目というのは、黒い瞳の奥に深い輝きをたたえた目だった。さらに、彼はつねに頭を昂然と構えていて、そのために彼の長身はいっそうきわだって見えるのである。たしかにそれは、法廷の裁判官席か、議会の演壇にでも立つか、あるいはブロンズのメダルにでも彫刻されるかして、並みいる群衆の上にひときわ高くそびえるにふさわしい頭だった。額はひいでて広く、また、縮れ毛ひとつないつややかな漆黒の髪は、獅子のたてがみのように、分けずに後ろへなでつけてあった。このような特徴、なかでも、炎を内に秘めたその目から察すると、この男はゆくゆくはアメリカの大政治家たるべき人間なのではないかと思われるかもしれないが、また見方を変えれば、それは単にこの男がキャロライナかアラバマ（いずれもアメリカ南部の州名）の生まれであることを示しているにすぎないともいえる。事実、彼はミシシッピー州の出身だった。彼の話し方には、まぎれもなく生まれ故郷のなまりがあった。そのすばらしい言葉のなまりを、今ここでいろいろ綴字を組み合わせて再現することは作者にはとてもできないが、その地方の事情に詳しい読者なら、容易にその口調を思い出していただけることだろう。ただし、その際、

この方言に結びつけて粗野卑俗なものを連想することだけはぜひつつしんでいただきたい。さて、ここに登場した、このやせた、顔色の冴えない、いかにもみすぼらしい身なりをした、それでいてなんとなく人をひきつけてやまぬ青年——秀抜な頭と前かがみの肩、明らさまな強情と一徹な情熱を秘めた表情、そして無骨者らしさのなかに傑物の趣きをたたえた風貌を持つこの青年こそ、男性の代表としてこの物語のなかで最も重要な役を勤める人物なのである。彼がきわめて目ざましい役割を演じたその出来事というのを、これからあらましを追ってお話しするわけだが、もし読者のなかに、単なる知的な理解に飽き足りず、感覚によっても事件の全貌を生き生きととらえたいと望まれる方がおありなら、ぜひ次のことを心に留めて読まれるようおすすめする——つまり、われわれの主人公の発音は子音を長く引き伸ばして母音を消音し、思いがけぬところで音を省略したり余分な付加音をまじえたりして、人をぎょっとさせるところがあるし、また彼の話し方には、なんとなく熱気がこもってしかも茫漠とした調子がみなぎり、それはほとんどアフリカ的とでも呼ぶべき豊富な陽光を思わせ、あるいは実り豊かな棉畑のひろがりを感じさせるような声の響きがあった。ルナ夫人は青年のこのような特徴をすべて目にしたけれども、彼女が理解したのはそのごく一部分にすぎなかった。さもなければ、彼女はついさっきの彼の質問に対して皮肉な態度で、「このなりって、それでは、いつもはそうではございませんの？」などと答えはしなかったことだろう。ルナ夫人の態度には、馴れ馴れしさ——それも、相手を閉口させるようなひどく馴れ馴れしいところがあった。

バジル・ランサムは少し顔を赤らめた。それからこう答えた。「どういたしまして。ぼくは外で食事をとるときには、たいてい六連発の拳銃とボーイー刀（アメリカ式の猟刀）を持参してでかけます」そう言うと彼はなんということはなしに自分の帽子を手にとった——山の低い、幅広のまっすぐな縁のついた黒のソフトだった。ルナ夫人はこの人物のしている仕事についていろいろ知りたくなった。そこで彼に椅子をすすめ、あらためて、妹が心からお会いしたがっているという意味のことを彼に話した。もしディナーを召し上がっていただかないと、きっと妹はひどく残念がることでしょう——とにかくあの人は宿命論者のようなところがあるから、たいていのことには気落ちしたりはしないのですけれど。本当に申し訳ないのですが、私自身はこれから外出することになっておりますの。ボストンでは、招待があったらそれにとびつかなくてはいけないんです。オリーヴもディナーがすめばどこかへ出かけるはずですわ。でも気になさることはありま

せん。よろしかったらあなたもごいっしょに行ってごらんになったら。いいえ、パーティではありません――オリーヴはパーティなどに出かけたりはしませんわ。あの人の好きな、例の、あやしげな集会へ行くんです。

「その集会といいますのは、どんな会合なのですか。お言葉から察しますと、ブロッケン山（ドイツ中部ハルツ山脈中の最高峰、伝説で有名）で開かれる魔女の集会のようにも思われますが」

「ええ、まあそんなところです。集まってくるのはみんな、魔女とか魔法使いとか、霊媒とか、降神術者とか、それにそうぞうしい過激派の連中ですわ」

バジル・ランサムは目をまるくした。褐色の瞳の奥に黄色い輝きが増した。「といいますと、つまりあなたのお妹さんは、そのそうぞうしい過激派の一員というわけですか？」

「過激派？　ええ、あの人は女ジャコバン党員よ――ニヒリストなんです。存在するものはすべて悪しきものなり、といった調子ですの。あの人と食事をなさるのでしたら、あらかじめそのことを知っておいたほうがよろしいわ」

「ああ、助けてくれ！」と口のなかでぶつぶつ言って、青年は腕組みをして椅子に深く身を沈めた。彼はするどい不信の念で、ルナ夫人をまじまじと見つめた。こうしてながめると、たしかに、夫人はかなりな美人で、髪はぶどうの房を思わせる豊かな巻毛だった。タイトのボディスが、彼女のうちにみなぎる生気のために今にもはちきれそうに見える。ペチコートのこわばったひだの下からは、大げさにヒールを高くした靴に支えられて小さなふっくらした足がのぞいていた。彼女は魅力的でもあり出しゃばりでもあるのだが、どうやら出しゃばりの感じのほうが優先している。彼には、ついさっきの彼女の話もいわでもがなのことのように思われるらしいようすだったが、今のところは彼も打ち明けられた事実にすっかり心をうばわれているのか、いずれにしてもとにかく、しばらくのあいだ、彼はおし黙ったままルナ夫人の上に視線をさ迷わせ、妹の性格とは何ひとつ似たところのない彼女の性質から推して、いったいこの婦人の場合はどのような主義を表わしていることになるのかと考えているようだった。実際、バジル・ランサムにとっては見るもの聞くものが驚きの種になることが多かった。ことにボストンの町には彼を驚かすものがいっぱいあって、しかも彼はなんでも理解してやろうと考えるタイプの男だった。ルナ夫人が手袋をはめようとしているのを見ても、これまでついぞそんなに長い手袋を見たことのないランサムは、すぐにストッキングを連想して、ガーターなしでどうやって肱の上で留めておくのだろうかと不思議に思った。「ええ、そうではないかと思っておりました」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

やっとのことで彼は言葉をついだ。
「何がそうではないかですの？」
「つまり、その、ミス・チャンセラーが、今おっしゃったような方ではなかろうか、ということなのです。社会改革の気風にあふれた町でお育ちになったのですからね」
「あら、町のせいではありません。それはオリーヴ・チャンセラー個人の問題にすぎないのです。あの人は手がとどきさえしたら、太陽系の運行だって改革しかねない人ですわ。だからあなたもお気をつけにならないと、改造されてしまいますよ。私がヨーロッパから帰ってきてみたら、あの人はあんなふうになっていたんですの」
「ヨーロッパにいらしったんですか？」とランサムはたずねた。
「あら、そうですよ！　あなたも？」
「いえ、ぼくはまだどこへも行ったことがありません。お妹さんもおいでになったのですか？」
「ええ、でも妹はほんの一、二時間滞在しただけなんですの。あの人はヨーロッパが大きらいなんです、ヨーロッパなんて全部廃止してしまいたいところでしょう。ところで、私がヨーロッパにいたことをあなたはご存じなかったんですか？」言葉を続けるルナ夫人の声には、自分の名声の及ばない範囲があることを知った婦人のみせる、いささか恨みがましい調子がこもっていた。
　ランサムにすれば、ほんの五分まえまでは彼女の存在すら知らなかったと答えたいところだったが、婦人に対してそのような返答をするのは南部の紳士にあるまじきことであると思いなおして、さりげなく自分のボイオチア（古代ギリシャの一地方、住民は頭の鈍いので有名）的無知（彼はこんな雅趣に富む言いまわしが好きだった）に対する許しを乞うたうえで、もともと自分はあまりヨーロッパのことに注意を払わぬ土地に暮らしていたせいもあって、てっきり夫人がずっとニューヨークに住んでおいでになるとばかり思っていたと述べるにとどめた。この終わりの言葉はまったく口から出まかせに言ったものだった。当然のことながら、彼は今までルナ夫人のことなどついぞ考えたこともなかったからである。しかし、この心にもない出まかせが仇となって、彼はさらに夫人の追及をうける羽目におちいった。
「私がニューヨークに住んでいるとお思いでしたら、いったいどうして訪ねてきて下さいませんでしたの？」と相手は問いつめた。
「ええと、それはですね、ぼくはあまり外へ出ない性質だもんですから。法廷に出かけます以外にはね」
「法廷って裁判所のことですか？　こちらのお国ではどんな方もなにかお仕事を持っていらっしゃる！　あなた

も大きな野心をお持ち？　お見うけしたところ、そうらしいですわね」
「ええ、それはもうたいへん」バジル・ランサムはにっこり笑いながら、南部の紳士がよくやるように変に女性的な優しさをこの副詞にこめて答えた。
ルナ夫人は説明した――自分は夫が亡くなって以来ずっと、数年間ヨーロッパで過ごし、ほんのひと月まえに帰国したばかりであること、その際、自分は、この世における自分の唯一の宝である幼い息子をつれて帰り、いうまでもなく、子供の次に最も近しい縁者である妹のオリーヴを目下訪問中であること、などを話して聞かせた。
「でも以前どおりというわけにはゆきません」と夫人は言った。「オリーヴと私はことごとに意見がくいちがいますので」
「でも息子さんとはご意見が合うんですね」
「そりゃそうですとも。ニュートンとならいつだってうまが合いますわ」夫人はさらに言葉を続けて、アメリカに帰ってきてからというものは、どのようにやっていったらいいのかさっぱりわからないとつけ加えた。故郷にもどっていちばん困るのはそれなんですの。この年になってもう一度生まれなおしたようなもので――あらためて人生をやりなおさなければならないんですからね。何のために帰ってきたのか、自分でもよくわからないのです。ボストンで今年の冬を過ごしてみたら、とおっしゃって下さる方もあるのですが、でもそればかりはどうしてもがまんできません――少なくともそんなことをするために帰ってきたのではないのですから。たぶんワシントンで家を借りることになるはずです。小さなその町の名をお聞きになったことがあります？　私がヨーロッパにいたあいだにその町ができたのですって。それに、オリーヴはどうも私にボストンにいてもらいたくないらしいんです、正式にちゃんとそう言ったわけではありませんけれども、まあ、そこがあの人のせめてものとりえですわ。あの人は何によらず形式を通すことはまったくありませんから。
ルナ夫人がこの最後の断言を下したちょうどそのとき、バジル・ランサムは椅子から立ち上がった。若い婦人が音もなく部屋にはいってきて、今の言葉を聞きとがめて急に立ち止まったからである。彼女はその場にたたずんだまま、人前を意識して真剣ともいえる表情でランサムを見つめた。あるかなきかの微笑が口もとに浮かんでいた――ほとんどそれとわからぬほどの微笑ではあったが、彼女のもって生まれた容貌のいかめしさを明るくするには十分だった。いってみれば、それは牢屋の壁に射した淡い月影になぞらえてもよろしかろう。
「それが本当でしたら」と彼女は言った。「お待たせし

たお詫びを申し上げなくてもよいことになりますね」

低くて気持のいい声――洗練された人の声だった。そして彼女がほっそりした白い手を来訪者にさしだすと、相手は（ルナ夫人の不謹慎な打ち明け話の聞き手をつとめたことに後ろめたさを感じていたので）しいてしかつめらしい口調をよそおって、お目にかかれたことをこのうえなく喜ばしく思うと挨拶した。ミス・チャンセラーの手が冷たくまた力もないことに彼は気がついた。ただそっと彼の手のなかに置かれただけで、ほんのちょっぴりとも握りかえそうとはしなかったのである。ルナ夫人は妹に向かって言訳がましく、今しがたあけすけな話をしたのはランサムが身内の者であるからなのだと説明した――でも実のところこの方は私たちのことをあまりご存じないようだけど。ご自分では、南部の紳士のたしなみから、よく存じておいでのようなふりをなさっていらっしゃるけれど、たしかにこの私――ミセス・ルナ――のことなどご存じだったとは信じられないわ。ところで、もうそろそろディナーに出かける時間のようね。さっき馬車が来るのが見えたわ。私のいないあいだに、お好きなように私のことをこの方に話してあげて下さいな。

「あなたが過激派だってこの方にお話ししておきましたよ。だからあなたも、私のことを厚化粧のおひきずりとでも言って下さって結構よ。この方を改造してごらんになるといいわ。ミシシッピーの方だから、きっと全身これ不正のかたまりよ。今夜は帰りがかなり遅くなるかもしれないの。みんなで観劇会に行くことになってるんです。だから私たちだけ早めに夕食をとることにしましたの。では、失礼します、ランサムさん」ルナ夫人はふんわりした白いショールをかき寄せ、彼女の大柄な美しさをさらにきわだたせて、言葉を続けた。「しばらくここに滞在なさって、ご自分で私たちのことを判断なさるとよろしいわ。ニュートンにも会っていただきたいものです。あの子はほんとにりっぱな子供ですわ、それに、あの子のことで相談にのっていただきたいこともあります。あら、明日一日しかおいでになりませんの？　まあ、それじゃどうにもなりませんねえ。では、ニューヨークへ訪ねてきて下さいましね。私、この冬しばらくは、ニューヨークで過ごすことになるはずです。お便りさしあげますわ。私、このままあなたを逃がしはしませんからね。どうぞ、お見送りいただきませんように。優先権は妹にあるんですもの。オリーヴ、あなたこの方をあなたたちの女性会議へお連れしてさしあげたらいかが？」ルナ夫人のあけすけな物言いがこんどは妹に向けられた。あなたの格好ときたら、まるでこれから航海に出かけますよとでもいいそうじゃないの、と夫人はミス・チャンセラーをやりこめたのである。「ありがたいことに、私は晩

の着替えをしてはならないなんて妙な考えにとりつかれておりません！」と彼女は部屋から出てゆきがけに戸口のところでそう宣言した。「服装のことをあれこれ気に病んでるわ、軽薄な女に見られるのをこわがっている連中がね！」

第二章

服装について周到な注意を払ったにせよ払わなかったにせよ、ミス・チャンセラーに関するかぎりルナ夫人が言ったような非難はたしかに当てはまらなかった。彼女は飾りひとつない地味な黒ずくめのドレスを着ていた。光沢のある薄い色の髪は丹念にひきつめられていたが、それにはルナ夫人が自分の髪をわざとふさふさとほつれさせるのに払ったと同じ慎重な配慮がうかがわれた。はいってくるなりすぐに彼女は椅子に腰を降ろし、ルナ夫人がおしゃべりをしているあいだ、たえず視線を床に釘づけにし、バジル・ランサムはおろか、この多弁な夫人のほうすらちらとも見ようとしなかった。おかげで青年は存分に彼女を観察することができた。その結果、どうやら彼女は興奮状態にあるらしく、しきりにそれをおもてに出すまいと努力しているようすが見てとれた。しかし、興奮の理由が何であるのか、彼には見当がつかなかった。あとになって、彼女の性格は荒波にもまれる小舟のように不安定なものであることが彼にもわかってくるのだが、このときはそんな事情のわかるわけがなかった。ルナ夫人が部屋から出て行ってしまっても、オリーヴはまるで魔法にかかって目を上げられなくなったように、あらぬかたに視線をそらせたままその場にすわりこんでいた。ここでひとつ読者に打ち明けておこう――この物語が展開するにつれ、ミス・オリーヴ・チャンセラーについてはまことに玄妙不可思議な情報をお伝えしなければなるまいが、このミス・オリーヴ・チャンセラーには羞恥の発作というまことに気の毒な持病があって、この発作にかかっているときには、鏡に映った自分自身の目すら見ることができないのである。今の場合も、そのような発作が、これといった明らかな原因もなしに突然彼女を襲ったのだ。もっとも、実はルナ夫人がだしぬけに個人的な話題を持ちだしたのが事態をいっそう悪化させたのではあるが。ルナ夫人くらい私事について吹聴したがる人もあるまい。もし特定の個人に対してはげしい恨みの情をいだいてはならないとみずから心に命じるところがなかったら、オリーヴはそのような姉のはしたなさに憎しみを感じたはずである。バジル・ランサムは、たしかに第一級の知性をそなえた青年ではあったが、まだまだ自分の経験がごく限られたものであることをよく承

知していた。したがって、少数の事例から速断ともなりかねない結論を引き出すことは厳重に警戒していたのだが、最近ニューヨークの法曹界に認められたばかりで目下依頼人を物色中の身にとっては貴重な二、三の結論をすでに身につけていた。その結論なるものの一つは、人間を最も簡潔に分類すると、物事を深刻に考える者と気楽に考える者とに分けることができるということだ。ミス・チャンセラーはこの深刻派に属するということを彼は即座に見ぬいた。そのことはいかにも神経質そうな彼女の顔だちに非常な強烈さで現われていたので、彼はほとんど二十語もかわさぬうちに、彼女に対してなぜとも知れぬあわれみを感じた。彼自身は生まれつき楽天的に物事を受けとる性分だった。彼は最近になって債務者に強談判をしたことがあるが、それというのも、さんざん考えたあげくのことであり、やむをえない事情にせまられたからだった。ところが、この、薄緑色の目をした血の気のない女性の場合は、そのとげとげしい容貌といい、うわずった物腰といい、一見して病的とわかるのだ。彼女が病的であることは明々白々の事実といっていい。ランサムは、あわれにも、まるで自分が一大発見でもしたかのように得々としてこの事実をみずからに向かっていいきかせたが、しかし、実は、このランサムという男がこのとき見せたほど「愚かな」まねをしたことは今までにいっぺんもないことだった。ミス・チャンセラーが病的であるといったところで、それはこの女性についてなんら重要な発見をしたことにはならない。この女性の存在を十分解き明かすためには、そのような事実のはるか背後にまでさぐり入らなくてはいけないのである。彼女が病的である理由は何か、彼女の病的なところがとくにひどく目立つのはどうしてなのか？　もし、この謎を十分解くことができるほど深く背景にさぐりを入れていたら、ランサムもとび上がって喜ばずにはいられなかったことだろう。彼がこれまでに知り合った女性は、ほとんどが自分と同じやわらかな南部の風土に生まれ育った連中であり、彼がルナ夫人の妹のなかにかぎつけた（そしていちはやく慨嘆を覚えた）ような性向を彼女らが示すことはめったになかった。彼が好むのはそういう女だった――どうもこのミス・チャンセラーはまちがいなくそうらしいが、彼女みたいに物事を深く考えすぎたり、政治の問題にみずから責任を感じようと思ったりしない女が彼は好きだったのだ。世の中の女性たちがみんなひかえめに家庭内のことだけに専念し、それに類する事柄だけに喜怒哀楽を限定して、公の仕事はたくましい男性どもにまかせてくれさえしたら！　ランサムはそんな社会悪の矯正法を想像してみるのがすきだった。つまり、ランサムという男はそれほど未開の田舎者であることを、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo